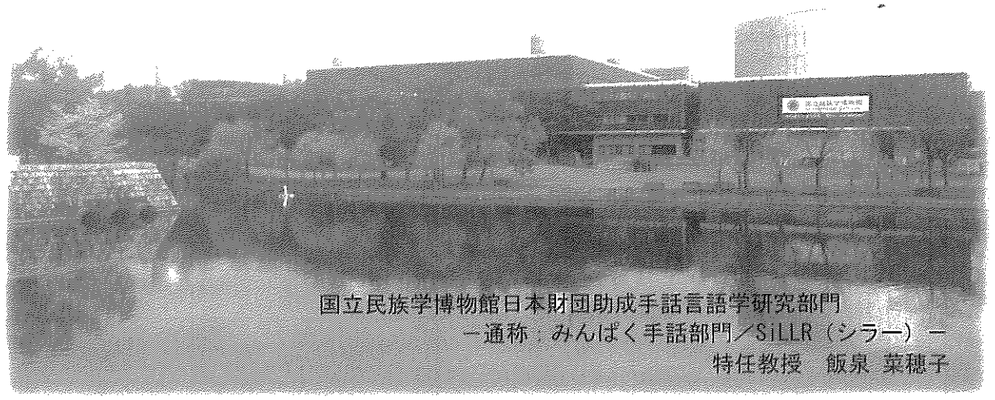
みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み②



国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門
－通称：みんぱく手話部門／SiLLR（シラー）－

特任教授　飯泉 菜穂子

みんぱく手話部門（SiLLR）は何をしているのか・・・・・・・・・・・・・・

みんぱく手話部門は 1.手話言語学研究の推進と研究成果のアウトリーチ事業、2.学術手話通訳者の養成の二つの目標を掲げていて、私は 2 の学術手話通訳者養成に関わる諸事業を中心的に担っているということは前回ご紹介させていただきました。SiLLR では 1 と 2 をそれぞれ手話言語学研究者と手話通訳養成の専門家（飯泉）が中心的に担っていますが、両者は縦割りに分断されたものではなく、密接に連携しながら活動を進めています。例えば学術手話通訳養成の中心事業である「学術手話通訳研修事業」では、これまで毎年秋（9 月末）にみんぱくが開催する「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ」（国際研究集会）で日英同時通訳を介した JSL 通訳チームの一員として登壇することを研修の目標のひとつとしてきました。

「アウトリーチ」という言葉は福祉の分野でも使われていますが、学術分野においては研究等の成果を積極的に（主に大学を対象として）外部に提供していくことを意味します。私自身のことで言えば、みんぱくの教員として、SiLLR の所属になる前から出講させていただいていた東京の大学や、着任後にご縁をいただいた関西圏の大学で「手話通訳について」（主に“言語通訳としての手話通訳”という観点からの）講義を持たせていただいていることがアウトリーチ活動に該当します。また、みんぱくに手話拠点が出来たことから、最近では様々な公的機関・高等教育機関との協働のご提案やご相談をいただくことも出てきています。それらに可能な限り対応していくのも、手話部門と私自身の役割です。

部門設立に先行したトライアルプロジェクトについて・・・・・・・・・・

さて、この連載のタイトルでは、またここまでの記述でも、主に（学術手話通訳）「養成」という言葉を使っていますが、実は私の担っている事業の SiLLR 内での正式名称は、学術手話通訳「研修」事業です。学術手話通訳「研修」には二つの柱があり、ひとつが年間を通して実施している「研修事業」、もうひとつが複数の「関連講座」の展開です（少々分かりにくくて申し訳ありません）。

「研修事業」の端緒となったのは、2012 年度から 2013 年度の二年間、国立大学法人筑波技術大学、障害者高等教育研究支援センターとみんぱくの共同プロジェクトとして実施されていた学術手話通訳研究協力員養成事業です。前回、私とみんぱくの関わりは 5 年半前に遡るということを書きましたが、当時、民間で唯一の手話通訳養成校（学校法人大東学園世田谷福祉専門学校、手話通訳学科・手話通訳専攻学科）の責任者をしていた私に、事業研修運営メンバーとして参画するようお声がかかったことが今日につながっているというわけです。プロジェクトの趣旨は、各運営メンバーの推薦する現役手話通訳の方たちのご協力のもと、学術手話通訳養成のあり方を探るというものでした。

この試みが 2014 年度から、みんぱくが日本財団の助成を得て実施していた手話言語関連プロジェクトに統合されるにあたり、手話通訳協力員（のちに研修員に改称）のスクリーニング（選考試験）を導入しました。スクリーニングを経た現役手話通訳者の方に、毎年秋にみんぱくが実施している民博フェスタ（国際研究集会）に登壇してもらうことを目標に、学術手話通訳を目指すにあたって必要と思われる研修を集中的に実施する…という現在の「研修事業」のひな型が、この時点で成立しました。筑波技術大学との共同期間も含めると 4 年間「研修事業」トライアルを継続したことが、SiLLR 設立の大きなきっかけになったと聞いています。

連載にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私たちが目標としているのは、学術領域に対応できる手話通訳者を増やすことのみならず、専門領域の手話通訳者が見合った報酬を受け取ることが出来るような、とりわけ（みんぱくが拠点とする）関西地区における枠組み（システム）の構築です。学術の諸専門領域に対応しうる通訳者の養成もさることながら、手話通訳一本ではなかなか生計を営むことが困難な現状下、かなり大きな目標ですね。また、既に学術手話通訳の養成や活用、紹介などを掲げていらっしゃる他組織もいくつかあるものの、これまでにない新しいチャレンジであることは間違いありません。事業を引っ張っていく立場の私自身も、迷いつつ悩みつつの展開です。そこで、理念的なものよりも、まずは実際にこの 1 年半の間に何をしてきたか、何をしているかについて、次回から何回かに分けて具体的にご紹介させていただこうと思います。